

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K01137

研究課題名（和文）古地図に描かれる山西辺境地域ならびに首都北京の防衛空間の構造分析

研究課題名（英文）Spatial analysis of the defense strategies indicated by old Chinese maps depicting Shanxi boundary region and Capital Beijing

研究代表者

杉浦 和子 (Sugiura, Kazuko)

京都大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：50155115

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：明末清初の「山西辺垣図」群および清代後期の「八旗三軍布防系北京図」群を対象として、辺境地帯と首都の防衛システムに関する地理情報を抽出した。主な研究方法は、地図の比較分析と漢籍史料との照合である。山西鎮では、二本の長城の内側に配置された軍事拠点群により重層的な防衛空間と柔軟な拠点間ネットワークが構成されていた。19世紀中葉以降に集中して繰り返し制作された布防系北京図は、多数の八旗関連施設の破損・老朽化が問題になった緊急事態と密接に関わる。これらの防衛地図が頻繁に制作されたことは、国家の統治者が国防上重要なこれらの地域における詳細な軍事防衛情報の更新と伝達を必要としていたことを示唆する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

漢籍による文字情報では得られない地理情報を古地図から抽出し、その空間パターンを提示することにより、地図分析の有効性と可能性を高める点で、大きな学術的意義を有する。こうした地図空間分析の成果は、中国辺境研究や八旗研究の分野にも貢献する。地図分析により得られた知見を広く提示することは、「山西辺垣図」群や「布防系北京図」群といった希少であるけれども学問的価値の高い地図資料の発掘と共有に資する点で、社会的意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：‘Maps along the Great Wall in Shanxi’ from the late Ming and early Qing dynasties and ‘maps of Beijing indicating security strategies carried by the Eight Banner and Three Armies’ in the late Qing dynasty were analyzed to extract geographical information on de defense systems. The main research methods were comparative map analysis and comparison with Chinese historical documents. In Shanxi region, the military bases located inside the two Great Walls formed a multi-layered defense space and a flexible network between the bases. The repeated production of ‘Beijing maps of capital’s safety and security’, concentrated in the middle to late 19th century, was closely related to the situation that numerous Eight Banner-related facilities were seriously damaged and deteriorated. The frequent production of the defense maps suggests that the state rulers required the updating and dissemination of detailed military defense information in these essential areas for national defense.

研究分野：人文地理学

キーワード：地図 長城 八旗 防衛 明清

1. 研究開始当初の背景

本研究の端緒は、2009年と2014年に、題簽を欠く中国古地図が発見されたことである。これらは文献学の研究者たちとの共同研究により、1点は明末清初の山西の内長城一帯を描く手描き彩色の布陣図で、他の1点は、清代後期の北京の内城の街区に八旗三軍の24種類の記号を示した大判の手描き彩色の都市図と判明した。文献調査と国内外の諸機関の所蔵調査をもとに、同類の古地図が数少ないながらも存在することを突き止め、これらを「山西辺垣図」群また「布防系北京図」群として予備的な研究に着手した。これら2つの地図群は、辺境図および都市防衛図という特殊な性格の地図であることに加え、所在が確認された資料に限られることもあって、研究の蓄積は進んでいない状況であった。とりわけ、歴史研究や古地図研究とは異なる、「地図」を「地図」として分析対象として地理情報を抽出するという観点からの研究はほとんどなく、統治や防衛に用いるという明確な目的を持って作成された「実用地図」として両地図群を分析した研究も限られていた。こうした従来の研究に対する問題意識から、本研究に取り組むことにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次の3点である。明末清初の「山西辺垣図」群および清代後期の「布防系北京図」群を素材として、明示的に描かれてはいない防衛システムに関する地理情報を抽出し、顕在化すること、さらにこの情報をもとに、北京城内における三軍(満・漢・蒙)八旗による守防体制と空間配置、および山西長城地帯の布陣体制とネットワーク構造を解明すること、「山西辺垣図」群ならびに「布防系北京図」群、それぞれの間での空間構造の比較分析を通じて、各地図群の作成背景と用途を明らかにすることである。これらを達成することにより、明末清初の長城地域の軍事的状況と清代後期の北京の治安・警備システムの特質を空間的な側面から解明する。

3. 研究の方法

「山西辺垣図」群ならびに「布防系北京図」群についてのおもな研究方法は、地図分析と漢籍資料との照合、類品調査である。

「山西辺垣図」群についての研究方法：山西鎮の管轄する東路・中路・西路の地図セットごとに地図に描かれる防衛拠点(陣、城、関)の指示する東西南北方向で照準する拠点と里程情報の抽出；防衛拠点ごとの指示領域(防衛領域)の描出；拠点間の連結ネットワークのベクトル特定と近接指数を用いた構造分析；『宣大山西三鎮図説』(萬曆31年(1603))、『三関図説』(萬曆35年(1607)序)(明)許論『九辺図・九辺図論』等に記載された辺鎮情報との照合と異同の特定；『古地図上の長城』(2022)等の地図集を含めた、明・清時期を中心とする中国辺境地図の所蔵調査と地図比較。

「布防系北京図」群にプロットされた24種類の八旗三軍記号を皇城と内城について数量確認と分析対象の北京図間での比較：地図中にプロットされた記号の位置(街区中、街路の出入口、交差点、諸施設の隣など)と向き(方向)の特定と分類；各「布防系北京図」についての八旗三軍記号の分布図作成；『欽定八旗通志』、各代の『大清會典事例』、『光緒順天府志』、『金吾事例』等の八旗の兵制に関する史料から八旗三軍の防守体制に関するデータ(施設、役職、担当区域等)の抽出と相互比較；『新編北京歴史輿圖集』(2023)等の地図集や図書館の検索サイトを利用した北京図の所蔵調査と地図比較。

4. 研究成果

(1)清代に作成された「布防系北京図」群に描かれる守備空間の分析：清代の八旗三軍(満州・蒙古・漢軍)の関連施設の所在を詳細に示す北京図は、2024年3月時点で、全7点の所在が確認されている(次頁の一覧を参照)：『精絵北京旧地図』(嘉慶年間(1797-1815)初)、『*Map of the Inner City of Peking*』(1865?)、『北京内城図』(19世紀後半)、『道光北京内外城全図』(1845)、『北京内城図』(仮題)(道光年間(1821-1850))、『*Map of Peking*』(1863-1865)、『*Map of Beijing*』(19世紀中頃)(所蔵機関名省略)。推定される制作年代は、『精絵北京旧地図』が最も早く、他6点は19世紀後半である。素材は絹と紙のいずれかで、『道光北京内外城全図』(1845)を除き、内城が描かれる大判の手描き彩色図である。7点の北京図に共通する最も大きな特徴は、八旗三軍を色と形の組み合わせの異なる24種の記号で示され、それらが地図中にプロットされていることである。これらの記号の分布は、「八旗方位図」として知られる内城の居住区分ではなく、紫禁城を除く皇城を含む内城における守備担当域区分に対応している(Tanaka 2016)。これら7点の北京図の相互の詳細な関係は明らかでないが、描図の特徴に関しては、『道光北京内外城全図』の内城部分と「北京内城図」(仮題)が、また、『*Map of Peking*』(1863-1865)と『*Map of Beijing*』(19世紀中頃)とが類似している。『*Map of the Inner City of Peking*』(1865?)は、中国語で書かれた地図を原図として描かれたものである。地図中で八旗三軍記号をほぼ特定することが可能であった5点の北京図に記された記号数と文献に記載された八旗関連施設の数量とを比較した。5点の北京図に記された八旗三軍記号の数量には大きな隔たりが

Abbreviation	Name of Map	Institution of storage (city)	period of publication	size: vertical x horizontal	material of map sheet	painting	languages on map	range of map	scale
BL Map	<i>Jinghui Beijing jiu ditu</i> 精繪北京旧地圖 (<i>Finely Painted Old Map of Beijing</i>)	British Library (London)	early stages of the reign of Jiaqing 嘉慶 (1797-1815)	184 x 221 cm	paper	hand painting, color	Chinese	Inner City of Beijing	not indicated
RGS Map	<i>Map of the Inner City of Peking</i>	Royal Geographical Society with IBG (London)	1865(?)	155 x 141.5 cm on sheet, (174 x 150.5 cm)	silk	hand painting, color	Chinese, English	Inner City of Beijing	1 : 4000
KU Map	<i>Beijing neicheng tu</i> 北京内城圖 (<i>Map of the Inner City of Beijing</i>)	Kyoto University (Kyoto)	late nineteenth century	151 x 135 cm	paper	hand painting, color	Chinese	Inner City of Beijing	not indicated
NLC Map	<i>Daoguang Beijing neiwacheng quantu</i> 道光北京内外城全圖 (<i>Complete Map of Inner and Outer Cities of Beijing in Daoguang's Reign</i>)	National Library of China (Beijing)	1845	240 x 180 cm	silk	hand painting, color	Chinese	Inner and Outer Cities of Beijing	not indicated
MD Map	<i>Beijing neicheng tu</i> 北京内城圖 (<i>Map of the Inner City of Beijing</i>) (* This is a tentative name.)	19th Century Rare Book & Photograph Shop (Stevenson, MD)	middle of the nineteenth century. It is not so distant from the period when NLC Map was made. [China, Daoguang Period], (1820-1850)	174 x 145 cm	silk	hand painting, color	Chinese	Inner City of Beijing	not indicated
ACM Map	<i>Map of Peking</i>	Asian Civilisations Museum (Singapore)	1863-1865	163.2 x 139.3 cm on sheet, (173.5 x 149 cm)	paper	hand painting, color	Chinese	Inner City of Beijing	not indicated
ROM Map	<i>Map of Beijing</i>	Royal Ontario Museum (Tronto)	middeof the nineteenth century.	173 x 145.3 cm on sheet	silk	hand painting, color	Chinese	Inner City of Beijing	not indicated

あり(表1) 資料の欠損や退色の影響だけが原因とは考えにくい。これらの記号が地図中にプロットされた位置と向きを厳密に特定し、これらの記号が八旗三軍に関わるどのような機能と関わるものか、八旗関連施設や官兵の任務に照らして検討する必要がある。八旗三軍の担当区域には、統括する官廳が置かれたほか、各区域はさらに多数の「汛」に細分され、「汛」ごとに、守備する官兵の拠点として、1か所の「堆撥」が設けられた。「汛」と「堆撥」の数量は一致する。また胡同(路地)や街道の出入り口等の要所には、人々の監視や規制のための「柵欄」が設けられていた(表2) 『精繪北京旧地圖』の記号数は、内城部分についても皇城部分についても、文献に記載される「堆撥」と「柵欄」の合計数にほぼ対応する。総数だけでなく、八旗三軍に細分して数量照合しても、大きな齟齬は見られない。

Name of Map (Institution of storage)	Innner City if Beijing except Imperial City			Imperial City	
	Manchu	Mongolian	Han		
精繪北京旧地圖 [British Library]	1057	386	308	1751	201
<i>Map of the Inner City of Peking</i> [Royal Geographical Society with IBG]	320	121	139	580	84
北京内城圖 [Kyoto University]	225	116	111	482	68
北京内城圖 [19th Century Rare Book & Photograph Shop]	301	113	131	545	59
<i>Map of Peking</i> [Asian Civilisations Museum]	634	179	179	992	89

表1. 5点の北京図中に確認された八旗三軍の記号数

Facilities managed by Eight Banners of three armies	Innner City if Beijing except Imperial City			Imperial City	
	Manchu	Mongolian	Han		
官廳*	40	16	16	72	16
歩軍堆撥房*	386	134	106	626	90
柵欄**	714	257	219	1190	116

表2. 八旗三軍が皇城と内城内で所轄する施設数

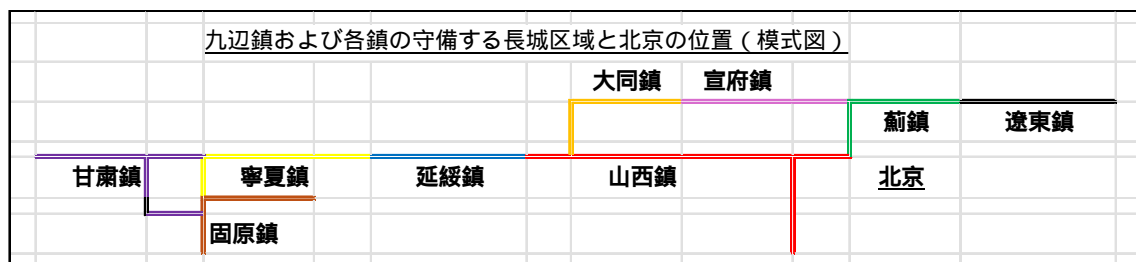
* 光緒順天府志, 卷八「京師志八」(光緒15年(1889)跋)

** 『嘉慶欽定大清會典事例』卷八百七十五「歩軍統領」(乾隆23年(1818)序)

『*Map of the Inner City of Peking*』、『北京内城圖』、『北京内城圖』の3点については、「堆撥」数との対応がうかがえるが、漢軍記号の数量が文献に記載されたものを上回る理由を突き止める必要がある。これらに対し、『*Map of Peking*』(1863-1865)については「堆撥」よりもむしろ「柵欄」の数のほうが近い。地図間での記号数の差異は大きいけれども、24種の八旗三軍記号は、北京城内の警備や治安維持を担当する歩軍の活動拠点もしくは駐屯にかかわるものであることは明らかである。北京図間での記号数の違いや文献情報との食い違いに関しては、清代の北京における八旗関連施設の建設および修復状況と照合する必要がある。北京に設けられた柵欄と堆撥の数は一定ではなく、必要に応じて一時的に追加されたり、朽ちたり破損したために減ることもあった。『欽定八旗通志』(乾隆51年(1796)成立)巻34「兵制志三」では、皇城には116、内城には1199の柵欄の所在が示されているが、『嘉慶欽定大清會典事例』(乾隆23年(1818)序)巻875「歩兵統領」では、内城の柵欄は9減って、1190となっている。また、『金吾事例』(咸豐元年(1851)序)章程巻一の「歳修堆撥柵欄」の項によると、乾隆五十九年(1794)十二月、京城のなかには「柵欄1215座、堆房1043座」があったことが記載されている。ところが、嘉慶十五年(1810)、道光元年(1821)、道光十四年(1834)と、柵欄や官廳、堆撥の損壊が甚だ多いことが述べられ、道光二十三年(1843)には、堆撥損壊が1365間、柵欄の損壊が847座におよび、それらのうち緊急に措置する必要があるものとして、「柵欄294座、更房52間」という数字を挙げている。官兵の駐屯する堆撥の規模は、大きなもので通常3ないし4部屋(間)あるが、小さなものは部屋(間)が一つであった。ここから推測すると、少なくとも数百座におよぶ堆撥が損傷を受けていたことがうかがえる。さらに道光三十年(1850)には、修理の必要な施設として、柵欄1140座、更房52間の数字が挙げられている。柵欄や堆撥の修復・維持管理には、膨大な費用が必要であったことも『金吾事例』に記載されている。柵欄や堆撥の損壊についての記録が道光年間(1821-1850)に頻繁に登場すること、八旗三軍の所在を示す7点の北京図の多く

が19世紀後半に制作されたものであること、北京図の間で八旗三軍記号の数量に大きな違いがあること、これら3点は相互に関わり合っている可能性がある。こうした八旗関連施設の数量の変動や相違は、八旗三軍の所在を示す北京図の制作目的を探るうえで、手がかりとなる。7点の北京図からうかがえる大きな特徴は次の2点である：現存する北京図7点はいずれも大判で、東西の比率は正確とはいえないにしても、記号分布が詳細に書き込める縮尺によって描かれていること。『北京内城図』（京都大学所蔵）のように、比較的ラフな筆致で描かれた紙の地図がある一方で、『道光北京内外城全図』（国家図書館蔵）のように、絹布に精緻な筆遣いで描かれた地図もあること。これらを踏まえると、八旗三軍の官兵たちが、担当する守備区域（汛）内で携行して任務にあたるための地図とは考えにくい。より上位の官庁で統括的な役職の者が北京内城全体の状況を把握するための地図であったことは明らかである。残存する「布防系北京図」の点数が多くはないことも、このことと矛盾しない。八旗三軍関連施設を示す北京図の成立の背景には、首都北京の警備と統治の体制が関わる。清朝が、首都の柵欄と堆撥に八旗歩軍、護軍、巡捕營官兵を駐屯させ、堆撥には多種の武器を保管させたことは、首都の警備・公安、さらに軍備の意味もあったとされる（王子涵・雷炳炎 2023）。というのは、中国の歴史においては、治安という社会問題が反乱鎮圧の軍事問題とも重なる事件が少なくなかったからである。皇城と内城に多数の柵欄と堆撥を設置し、それらを維持管理することは首都の安定にとって不可欠であり、そのために必要な詳細な分布図（北京図）が作成されたとしても不自然ではない。光緒27年（1901）ころから、この首都警備体制に連合軍による「新警察」が加わり、歩軍統領衙門は依然存続するが、大勢は「新警察」の普及へ傾いていく（渡辺 1981）。世界中の図書館等に所蔵される清代以降の北京図の悉皆調査を行ったところ（田中・木津・谷井 2020）、三軍（満洲・蒙古・漢軍）の八旗の関連施設の所在を詳細に示す「布防系北京図」群と同系統の性質を持つ大判の北京図が清代以降、民国期に入っても作成されたことを突きとめた。その1つが、大判の『京師内外城詳細地図』（中華民国17年（1929）、京都師警察廳總務處製、京師内外城二十區警察署測繪）である。首都を守備・防衛する機能が維持される必要性和そのための地図制作が継続される必要性があったことがうかがえる。

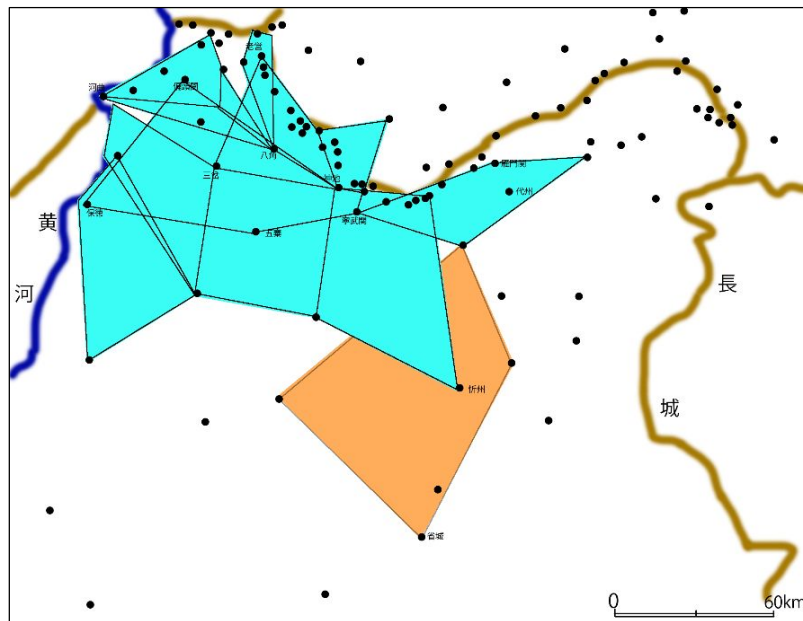
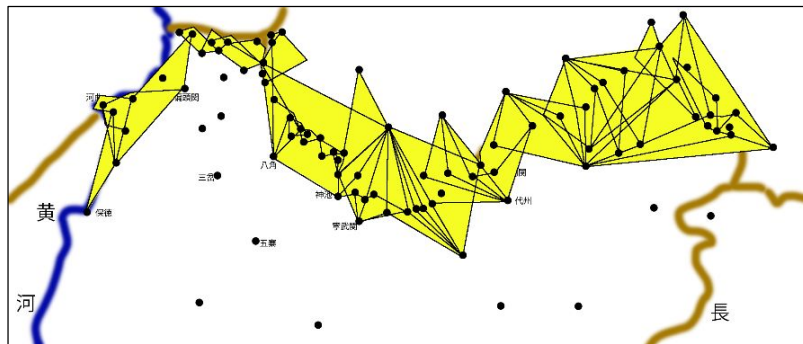
(2)「山西辺垣図」群に描かれる防衛空間の分析： 国立故宮博物院ならびに京都大学が所蔵する「山西辺垣図」群全体には、内長城の東路（6図幅）・中路（6図幅）を描く地図冊が各八組、西路（8図幅）を描く地図冊が九組あるが、東路・中路・西路を一組とし、欠落図幅のない資料は限られる。これら地図群の制作年代は、崇禎十年（1637）頃から順治十五年（1658）頃までと推定されている（盧雪燕 2013）。いずれも彩色手描きで、満文が併記された資料もある。これらは明代の各地の監察御史が定期的に宮廷に進呈したとされる国境防備地図のなかで、所在が確認されている希少な資料である（李孝聡 2007）。この「山西辺垣図」群の間には、同じ領域を描く地図の間ですら、画法、文字、テキスト、城、縣、墩、山河の位置や形状の点で明確な違いがある。山西の監察御史から宮廷に伝達される軍備情報が細かにかつ頻繁に更新されていたことがうかがえる。山西辺境地帯は、明代における九辺鎮による長城防衛体制においては、山西鎮（太原鎮とも三関鎮ともいう）と呼ばれ、内長城の東端である到馬関から黄河に至る本線と到馬関から北京を取り巻くように南下して黄榆関に至る支線の2本の長城を有する（下記の図を参照）。



「山西辺垣図」群は、首都の北西を防御する役割を担う山西鎮の本線部分の状況を描いている。この本線部分の長城は、北方の宣府鎮・大同鎮の管轄する辺牆と合わせて、首都に対して二重の防衛ラインを構成していた。山西鎮の管轄する内長城（本線）領域における主要な軍事拠点（関、城、堡、墩など）の構成する防衛空間の構成には、スケールの異なる重層性が確認できる。

「山西辺垣図」群に描かれる軍事拠点である陣（鎮、堡、墩など）の主要なものには、当該陣地から四方（原則として東西南北）に指示する他陣への路程が記されている。この情報をもとに指示される四陣を結び領域をその陣の指示領域、すなわち防衛領域とみなす。他陣を指す距離には長短があるため、指示領域（防衛領域）には広狭の違いがある。北方の長城付近の前線地帯には多数の陣が密に分布し、各陣を中心とする比較的狭い指示領域（防衛領域）が隙間なく並ぶ。指示する陣が長城外にある場合には、指示領域（防衛領域）が長城の内側と外側にまたがる（次頁の上図）。これに対し、山西鎮のなかでも重要拠点と位置付けられる九つの陣（雁門関、寧武関、偏頭関、代州、八角堡、山岔堡、神池堡、五寨堡、老嘗堡、河曲營、保德州）の指示領域（防衛領域）はより広く、前線地帯の指示領域（防衛領域）群より内側すなわち南方の一帯を覆う。この重要拠点の個々の指示領域（防衛領域）は前線地帯の指示領域より面積が広い。また、重要拠点の指示領域（防衛領域）群の一部は、前線地帯の指示領域（防衛領域）群と重なるだけでなく、さらに南方に位置する忻州の指示領域（防衛領域）とも重なる（次頁の下図）。山西内長城地域において、忻州は省城（太原）を指示する唯一の陣であることに注目される。すなわち、

山西辺境地帯においては、省城（太原）を起点として北部の長城（本線）に沿った前線地帯まで、面積と密度の異なる指示領域（防衛領域）を持つ陣群により、段階的かつ重層的な防衛空間が構成されている。下に、故宮博物院所蔵の『山西辺垣図』（図号263：順治15年（1658））に描かれる前線地帯の防衛空間および主要拠点と忻州により構成される防衛空間の構造を示す。図中の は陣を示す。首都北京は宣府鎮と大同鎮の管轄する北に位置する長城ならびに、その内側の山西の管轄する長城で防衛されるだけでなく、山西鎮の領域でも、山西省城を扇の要とし長城を扇の先端とする形で、重層的な防衛空間が構成されていることがうかがえる。線でも面でも北京を幾重にも防衛するシステムである。防衛拠点のネットワークの構造は、各陣間の連結関係を示すさまざまな指標からうかがうことができる。たとえば近接示数は、当該陣から他のすべての陣へ到達するための連結ステップ（ベクトル）数の総和であるが、この数値が最も小さい陣をネットワークの中心と見なしうる。四方の陣への里程情報を持たない（指示されるベクトルのみ）陣をネットワーク分析の対象とするか否かで、近接示数に違いが生ずることに留意する必要があるが、地理的な中心ではなく機能的な中心を特定できる点に近接示数の特長がある。近接示数の指標を用いた分析では、この地域の三関が必ずしもネットワークの中心あるいはその近くに位置しないという興味深い結果が得られた。『宣大山西三鎮図説』（萬曆31年（1603））巻三では、四至への里路を示す40陣のうち、近接示数が低いのは三岔堡（96）、八角堡（97）、神池堡（101）であった。73陣が分析対象となる『三関図説』（萬曆35年（1607）序）では、寧武関（196）、神池堡（198）、八角堡（217）であった。陣の改廃や指示対象の変更は、拠点間の防衛ネットワークの構造に大きく影響するし、近接示数にも反映される。「山西辺垣図」群の定期的な制作と宮廷への上程は、細かな軍事防衛情報の変更が遅延なく伝達されていたこと、またその必要性があったことを示唆している。こうした「山西辺垣図」群が明代から清代に入ってから制作されていたことは、中国における北西辺境地帯とその地図の意味を考える上で重要な手がかりである。（明）許論『九辺図・九辺図論』に示される、帝国内の山岳・河川・海洋と長城の配置に対する主要都市と軍事拠点の関係、帝国周辺の異民族や外国地域に対する情報と認識は、（明）羅洪先『広輿図』にも継承され、主題図としての辺境地図というジャンルを構成した。『広輿図』が中国国内のみならず東洋にも西洋にも大きな影響を与えたことを踏まえると、「辺境地図」ならびにそれが伝える辺境情報も広く伝達されたと思われる。また、ゴビ砂漠以南一帯については、北方民族の侵攻と明側の防衛という面だけではなく、相互にとって利益をもたらす朝貢貿易や馬市を通じた交流の面からも検討する必要がある。「山西辺垣図」群のなかにはモンゴル語表記が併記されたものがある。清朝にとって、山西地方は、「国境地帯」ではないにしても、看過できない「辺境地帯」として、また首都北京の北西に位置する「防衛地帯」として、定期的に情報をくみ上げることが有益だったと推測できる。



（3）「実用地図」の系譜：「布防北京図」群と「山西辺垣図」群に共通するのは、「実用地図」の役割である。地表の形状と事物の所在を示す一般図でも、世界観を表す概念図でもなく、首都警備あるいは辺境軍備として有用であることが求められる地図である。こうした「実用地図」の性格を有する地図群が、一定の形式と表現様式を用いて繰り返し制作された点、また、そうした「実用地図」の制作が近現代にも受け継がれる点において、両図群は地図制作の歴史において際立った特質を有する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田中 和子	4. 巻 106
2. 論文標題 「万国人物図」研究序論 前近代日本の人種観と世界観をさぐる	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 281, 282
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中 和子	4. 巻 61
2. 論文標題 『ロシア風俗画』(卷子)に描かれる世界図についての予備的考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都大学文学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 61-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中和子	4. 巻 72
2. 論文標題 「学界展望 学史・方法論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文地理	6. 最初と最後の頁 215, 218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4200/jjhg.72.03_215	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kizu Yuko and Tanaka Kazuko	4. 巻 -
2. 論文標題 Hedin and Classic Chinese Texts (Appendix 1, 2, 3, and 4)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The explorer Sven Hedin and Kyoto University	6. 最初と最後の頁 217, 256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中 和子
2. 発表標題 「万国人物図」研究序論 前近代日本の人種観と世界観をさぐる
3. 学会等名 2022年度史学研究会大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中和子・木津祐子・谷井陽子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 282
3. 書名 北京地図目録：清代から民国期に作成された北京図(Catalogue of Beijing Maps produced from the 17th century to the middle of the 20th century)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------